

わたしの戦争体験

福岡市中央区 倉地弘子

どうしても一度訪ねてみたいと思っていた中国へ、主人と行くことができた。

47年ぶりの祈願達成。上海、北京と観光、気持ちは次の目的地承德にとんでいる。バスは夕方承德に入り、とりあえず一泊。次の日予約していた車で通訳の方を同行して昔の我が家を見つけに出る。

棒槌山が見える。承德離宮ではよくスケートをして遊んだ。たまらなく懐かしい。高ぶる気持ちをおさえ西大街へ、車を下りて歩いてみる。なんとなく見覚えのある緩やかな坂道の路地を抜けると、『ここだ』と思った。「お父さんここよ、間違いないわ」、古い写真に写っている窓がそのまま残っている。頭に血がカーと昇って行くのを感じながら家の前に立った。主人が続けざまにシャッターを切る。周りにいた中国の人達が物珍らしそうに集まってくる。走馬灯のようにいろんな思い出が駆けめぐり、「いつかきっと承德に行こうね」が口癖だった母を連れて来ることができなかつた思いが込み上げ、涙がとめどもなく流れた。

昔我が家だった家に、今住んでいる人の良さそうな老夫婦に会うことができ、お茶をよばれながら、その当時の話を聞くことができた。とにかく凄まじい暴動が起こり、主のなくなった日本人の家は、はぎ取れる物は皆盗まれて、柱と壁ぐらいしか残っていなかったとのこと。10才まで育つた我が家は、外壁だけが残っていた。

昭和20年8月、母と母の妹と私の3人は、ソ連軍が侵入して来るから一時避難するようにと、追われるようにこの家を出て、再び帰って来ることはできなかつた。荷物同様に詰め込まれた汽車で錦州の駅までたどり着いた時、ホームにたくさんの軍人が座り込んでいる光景を見て、子供心に『元気のない兵隊さんだな』と思ったのだが、避難途中の汽車の中で終戦を知らされた母達の動揺は激しく、言葉も無く、ただぼう然と立ちすくんでいた。

この先、汽車も動かず、あてもなく、とにかく降ろされて、女学校の教室で集団生活が始まった。飢えと風に苦しんだ日々の中、終戦になって多くの軍人が殺されたらしい。各地で暴動が起こり暴れ回っているようだと、いろんな噂が広がる。召集されている父の生死もわからず、とにかく何でもいい、今の生活に役立つ物をと、鉄かぶとや空き缶を子供の私は遊び感覚で拾いまくる。

「ソ連兵が来るぞ、皆教室の中に入れ」と老人が叫ぶ。あわてて中に入り、ひっそりと息をひそめ、いい知れぬ恐怖におびえ体が震える。そんな時に限っておしっこがしたくなる。母が拾って来ている空き缶を出し「これにきなさい」という。ドアには鍵は掛けてあるが、なんのことはない。大きな靴で扉をけり破って侵入し、時計等を略奪して行く。

そんな日々が何ヶ月続いたか覚えていないが、大人たちは立ち上がり、集団生活に見切りをつけ、10人余りの仲間で家を借り、豆腐や焼いもを売り歩いて日銭を稼ぎ、とにかく日本に

帰れるまではと頑張ったのだ。

翌年の春、引揚船が出るとの話でもちきりになり、大人は皆身分証明書のような腕章が与えられ、帰れる日を楽しみに、疲れも忘れて郷里の話に花が咲き、お互いの住所を布に書いてもらい、引揚げの日を指折り数えて待っていた頃、大変な事が起こった。

壁に掛けていた母の上着が盗まれ、袖に大事な腕章を付けたままだったので、日本に帰るための大切な証明、今でいうパスポートが無くなったのだ。「もう引揚げ船に乗ることができない」と大粒の涙を流した母の元に、仲間が集まり、皆で知恵を絞った末、偽装腕章ができあがった。

いよいよ引揚げが始まり、難民の大行列はDDTを体の隅々まで容赦なく吹きかけられ、進め、止め、と何度もの検問をくぐりぬけ、母の偽造腕章は幸いにばれることなく、やっとの思いで胡蘆島から引揚げ船に乗船することができた。この時の母は、放心状態で遠くなって行く満州をいつまでも、いつまでも見つめていた。

何日航海して博多港の沖に着いたのか定かではないが、博多の灯りが遠くに見える沖あいで3日足止めをくって、ようやく上陸することができ、箱崎埠頭あたりだったと思う。かまぼこ兵舎になっていて、『松原寮』といったような気がする。引揚者のための収容所へと難民の行進。途中、その行列を一人も見逃すまいと必死で人捜しをしている人を見て叔母は、「あっ兄さんが」と大声をあげた。その瞬間、私は父に抱き上げられていた。ドラマのような再会だった。召集されていた父の方が一足先に日本に帰っていたのである。ラジオで引揚船が博多港に着くとどのニュースを聞き、矢もたてもたまらず探しに来たとのこと、母はただただ涙。この時父は、自分の一生の幸を全部使って、私達との再会を果たしたのか、この最高の幸はわずか9ヶ月しか続かなかった。

召集され帰国するまでの父は、極度の疲労に体は蝕まれていた。夢にまで見た日本に帰り、家族もそろってこれからという時、空腹を満たすこともなく、薬もなく、風邪がもとで帰らぬ人となった。

病床にあって、お見舞いに玉子を3個いただいた。これこそ金の玉子である。父は「おれはいいから、弘子に食べさせてくれ」と母に頼み、涙しながら死んで行ったという。その父も来年は50回忌が来る。

50年を振り返って見たとき、苦勞話を聞かせてくれる母も亡くなり、私の中にある記憶もだんだんと薄れて、今何か書き残しておきたいという思いにかきたてられてペンをとった。母が残した偽造腕章と布に書かれた仲間達の住所録は、赤茶けてぼろぼろになっているが、略奪、暴行、射殺等の悲惨な地獄絵の中をくぐりぬけて帰って来た引揚者の証であり、母から私への大切な形見となった。数限りなく思いは尽きないが、二度とこのような悲惨な思いをすることなく、世界中のどこにも戦争のない平和な時が来る事を心から願わずにはいられない。